現代社会における宗教対話の苦境と希望

卓　新平
菅野博史　訳

「宗教対話」は、二十世紀の後半以来、世界の宗教界においてもっとも流行しているスローガンであり、その主旨もまた現代社会全体の「対話」の思潮と発展に合致している。現代文明の雰囲気のなかで、異なる政治の間の相互の意思疎通、各種の文明の間の相互の調和適応、宗教の内と外との相互対話は、現代社会の発展の主流を具体的に表わしている。その目的は、たとえ互いの間で「共通点を求めること」や「共通認識」に達しなくとも、最大限、「共在」や「共存」を求めるようにすることである。そこで、「宗教対話」は、世界の現代文明が依然として宗教的色彩を濃厚に備えている状況において、文化を融合させ、社会の衝突を防止し、人類が本当に持続的に発展することのできるようにさせる重要な架け橋となる。宗教信仰の本質が現われ、また人類文明の英知がそこに反映される。ただ指摘しなければならないことは、「宗教対話」とその到達すべき目的は、よく言っても依然としてただ理想にすぎず、現実とはなっていない。現代社会のなかの経済の競争、政治の衝突、意識の矛盾、信仰の対立抗争、人種の差別、認知の誤解に直面して、「宗教対話」は、

まださまざまな苦境を克服するよう努力しなければならず、そうしてはじめてすばらしい希望を本当の現実とすることができるのである。

一　宗教対話の理念と方法

宗教対話は、対話に関わる宗教の信仰理念に基づく。このような信仰は、「超越」の側面を備えており、有限な人間の認知能力や直接に把握することのできる観念や理想を超出することに対する信奉、探求、敬慕を反映している。宗教信仰は、神聖、絶対、永遠の実在を忠実に守ることを表わしている。このような信仰はいったん確立すると、その相応する信念の伝統と原則の体系を形成し、その宗教の追随者を指導し、また制約する。一般的に言うと、宗教の対話は、これらの信念と原則の影響を受け、対話の結果もまたその信仰の観念と原則に反作用する。それゆえ、異なる信念と原則の間には、対話のときに、宗教の「内在」と「外在」が出合ったときに生じうる「張力」と、それらが共存融合する真正の「空間」が示される。ジョン・ヒックは、宗教の信仰理念について彼の理解を次のように述べたことがある。彼は、さまざまな宗教を超越する「絶対実在」の存在があることを信じており、各宗教のなかで信奉されている神は、この「絶対実在」に対する異なる文化的理解と説明であり、このような関係は、各宗教間の共存と対話のために基礎と可能性を提供する、と。歴史、文化の諸原因によってもたらされるさまざまな相違はあるけれども、真正の宗教は、その基本的な価値の理念と信仰の意義において、なおいくらかの類似点や共通点がある。これに対して、ハンス・キュングは、これらの共通点は以下の四つの面に具体的に表われていると考える。第一に、宗教は深い意味の次元とすべてを包括する広さや、生命の究極的、あるいは最終的な意味を伝えることができる。第二に、宗教は至高の価値、絶対の基準、最も深い動機、最も崇高な理想を保証することができる。第三に、宗教は共通の象徴、儀礼、体験、目標を通じて、安心感と、信頼、信仰、確信の感覚を生みだし、自己に備わっている力、安全感、希望を引き出し、精神的共同体と忠

誠に到達することができる。第四に、宗教は「絶対他者」に対する渇仰に基づいて、非正義の状況に反抗するために、堅実な基礎を提供することができる。[1] まさにこのようであるから、これらの真の宗教は、人類の生命、全体性、自由、団結のために、絶対の権威を提供し、このことから人類の尊厳、自由、権利に積極的な意義を備えさせるばかりでなく、究極的な内実を備える宗教的基礎を獲得させることができる。[2] ハンス・キュングの見方では、宗教の理念、及びその精神は、現代社会のなかの人類の共在、共存、共同発展のために、廃止することのできない四つの原則を提供する。第一に、非暴力と生命尊重の文化を堅持する。第二に、団結した文化と公正な経済秩序を堅持する。第三に、寛容な文化と誠意ある生活を堅持する。第四に、男女間の権利の平等とパートナーシップの文化を堅持する。[3] これらの原則の堅持する文化、生活、秩序は、現代社会において、宗教的でもあり、政治的でもある。

信仰の意義から見ても、あるいは政治の意義から見ても、宗教対話は平和に向かって進む道である。おおざっぱに言うと、このような宗教対話は、実際、信仰と政治の二つのレベルを包括するべきである。信仰レベルの対話から理解すると、宗教対話は、相互の傾聴、互いの尊重、双方向の交流であるべきである。これは信仰の真理をどのように認識するかに関わっており、すなわち真理は一つなのか多数なのか、同一の真理に通じるのに、多種の方法があるのかないのかという問題である。信仰レベルの対話には、「共通点」に対する追求もあり、「相違点」に対する尊重、さらに相違点に対する認知と了解がありうる、と言うべきである。ここで、もし唯我独尊や他者を排斥する態度を採用するならば、対話の道は塞がれてしまう。政治レベルの対話から理解すると、宗教はけっして真空のなかで生活するのではなく、生きた社会の現実と密接に関連しており、このことは宗教に社会の安定、世界の平和に対して責任を負わせるものである。そこで、宗教思想や伝統のなかで、「平和」、「平安」に関する資源は、十分に発掘するべきである。たとえば、ユダヤ教、キリスト教の「地上に平安がある」とする思想、平和を希求

する思想、イスラーム教の根本にある「平和」の観念、仏教の慈悲による世間の救済、平和の理想、道教の生命、自然、自由、平和についての見解、儒教や現代のさまざまな宗教の「世界は大同である」、「天下は一家である」に関する思想などである。異なる宗教の世界・人生に対する態度について、ここで対話を進めるべきであり、皆は地域の安定、民族の団結、人類の和解を維持するうえで、ともに協力するべきである。

宗教対話の主旨は、異なる信仰、異なる文化、異なる民族の間の相互理解にあり、このような理解の主旨は、それらが現実の社会のなかで共存することである。対話は「態度」にとどまらず、さらに深い意思疎通と理解を必要とする。もし互いの真正な了解と理解に到達することができなければ、このような対話はただ表面的で、皮相的で、出発点にすぎず、やはり前に向かって邁進する必要がある。宗教と人類文明、社会政治との密接な関連によって、宗教対話は少なくとも宗教内部、宗教間、宗教外部という三つのレベルの意義を有している。「宗教の内」の対話の意義から見ると、レイモン・パニカーは、「人間の行為、人間味豊かな行為としての対話は、我々のこの個人主義が特に盛んな時代において、生活のそれぞれの領域において、すべて非常に差し迫ったものである」[4]と指摘している。宗教信仰は生きた個人の信仰であり、宗教グループの内部の信仰者にも、精神性のある意思疎通の必要がある。いわゆる「宗教内対話」は、「『汝』によって引き起こされる内在的対話であり、『汝』は『我』にとって、けっして可もなく不可もないような存在ではない。何かあるものが我々の存在の最も深いところで活動し始めるのである」。そこで、「宗教内対話それ自体は、宗教的行為—我々を統一もしないし、我々を窒息もさせないで、新たに我々（あらゆる面における）を結びつける行為である。それは我々の存在の中心で生じ、救済の真理に対する我々の探求のなかで生じる」。また次のようにも言える。このような対話は、「内在的対話」として、「実在の意義—つまり救済の真理—に関する人間の問題であり」、人間になんとかして「ひとつの解放の真理の全部に入る」ことを促し、また「我々が我々自身のな

かの『他者』を発見するのを助ける」[5]。したがって、このような「宗教の内の対話」は、宗教の信仰と宗教の認知において人々が互いに接近することを十分に表わしており、マルティン・ブーバーの描写する、かの「汝」と「我」の対話関係を確立する。

「宗教間」の対話の意義から見ると、異なる信仰の伝統と体系の間の出合いと共存は、このような対話をなくてはならないものにさせ、かつ回避することができないようにさせる。実質上、「宗教の間の対話」は、異なる信仰体系の出合いが、各自の内在的信念の根本的真実と奥深い所に触れるときに、その信仰と生命の究極的意義の問題に直面するときに、展開される対話を意味する。このような対話の困難は、特定の宗教がその信念を他の宗教に無理に押しつけたり、特定の信仰が他の信仰を指導したり、あるいは統轄することによっては実現することができず、同様に、またあらゆる宗教の信仰の根本的真実と内在的本質を、同質同一の元素に還元、分類することによっては達成できないことにある。そこで、宗教間の対話には、その多元性、複雑性、持続性が表われている。ここで、その根本の前提としては、対話の開放性を持たねばならないことであり、善意と積極的な理解の態度を持たねばならないことである。たとえば、カトリック教は、「第二回バチカン公会議」以前には、各宗教との対話の基本に対して、閉鎖的な態度を取っていた。ところが、この会議の開催は、カトリック教に対話の門を開かせ、世界の各大宗教に対する善意と理解の態度を伝えた。一九六五年十月の会議が発表した「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」のなかで、カトリック教は正式に態度を表明して、「我々の時代は、人類が日を追って密接に結ばれ、各民族間の交流が日を追って増加しており、教会もキリスト教以外の諸宗教に対する態度についていっそう注意深く考察する。教会は人々の間に、ひいては諸民族の間に団結と相互友愛を促進することを自らの職責とする以上、はじめに人類の共通の問題を考察し、及び人類共通の運命にかかわる事がらに積極的に関与する」[6]と言った。大変意義のあることは、この宣言がカトリック教の教義学

上の関連規定をもはや強調せずに、救済史の思想方法を提唱していることである。世界の各大宗教に対する評価について、カトリック教は他の宗教を肯定し積極的意義を認める立場から、これらの信仰体系に対するカトリック教の理解を伝えた。「宣言」は、次のように認めた。「ヒンドゥー教徒は無限に豊富な神話と精微な哲学によって、神の神秘を探究し、表現する。彼らは修行生活の方法によって、あるいは深い瞑想によって、あるいは愛と信頼の心で神に身を寄せ、人生の苦悩から解脱することを求める。また仏教の内部では、各宗派の異なる方式に基づき、現世は変化し無常なものであり、厳しい苦悩に満ちていると認められ、敬虔信頼の道によって、円満な解脱の境界を追求し、あるいは自身の努力によって、あるいは天上界の助けを借りて、光り輝く悟りの境地に到達できると教えられる[7]」と。「宣言」は、さらにキリスト教とユダヤ教の関係に言及し、「キリストの教会はユダヤ教徒の信仰・美徳と召命を受けたことを承認する」ことを強調した。それはまたイスラーム教の「唯一の真神」に対する祈祷、イエスを預言者と尊ぶこと、及び処女聖母マリアと最後の審判を待つ宗教観念に言及し、イスラーム教の祈祷、施捨、斎戒において表われる敬虔を賞賛した。「宣言」は指摘している。「世界各地のその他の宗教も、教理、生活の戒律、神を敬う儀礼、行為の方法を提供し、さまざまな面から人心の不満を癒そうと努力した」と。そこで、「カトリック教は、絶対にこれらの宗教の真・聖なる要素を捨てず、かつ心からの敬意を抱き、彼らのやり方と生活方式、及び彼らの戒律と教理を考察する。これはすべて多くの面でカトリック教の堅持し、教えてきたものと相違があるけれども、全人類をくまなく照らす真理の光をしばしば反映している[8]」と言う。宗教間の対話のなかで、対話の双方は、双方向の交流、平等な対応の態度を持ち、互いの間には自己主張もあるし、相手の意見を傾聴することもあるし、両者の関係を絶えず調整しなければならない。

「宗教の外」の対話は、ここでは宗教と、その信仰体系の外部のさまざまな社会、政治、思想、文化、意識及び価値体系との対話を意味する。このような対話

は、人類の調和、世界平和を勝ち取るために必ず通らなければならない道である。宗教は信仰体系に属しており、信仰それ自体は、宗教信仰、政治信仰、グループや結社の信仰、文化や民族の信仰などを含むことができる。「そのなかの宗教信仰は、さまざまな宗教形式を包括し、精神性のある吸引力によって、人間の精神世界に影響し、把握し、あるいは導き、人間の精神生活を支配している。……政治信仰は、政治理念や理想によって、人間を吸引し、人間を団結させ、その信者にこの理念の未来の実現のために奮闘させる。……結社の信仰は、あるグループの信念であり、その特殊な信念によって構成され、公認された、あるいは秘密の結社の組織であり、社会のなかの『特殊領域』に形成される。……文化信仰は、関係のある人民大衆や民族のその文化伝統に対する追想、忠実な守り、聖化であり、ここからその文化理念や民族の魂を構成する[9]」。ただ信仰体系から見れば、宗教にはこのような「外向性」の対話を展開して、自ら自分の位置を測り、その他の信仰の訴えとの関係をうまく調整する必要がある。現代の現実社会において、このような「政」、「教」の関係の対話と協調は、もっとも重要である。

倫理、宗教、平和の間の相互関係に言及するとき、ハンス・キュングは影響の大きな三つの警句を提出したことがある。「世界倫理がなければ、共同の生存はない。宗教の平和がなければ、世界の平和はない。宗教対話がなければ、宗教の平和はない[10]」。ここで、ハンス・キュングは、宗教の平和を実現し、世界の平和を維持するという大局から、宗教対話の意義を取り扱う。宗教対話は、信仰の理念と政治の追求という、この二つの大きな面から、「共通点を求め、相違点を残す」や「和して同ぜず」を探求することであり、「対話」の道は、実に「理解」の道である。このために、ジョン・ヒックは「宗教の理解がなければ、宗教の対話はない」という論によって、ハンス・キュングの上述の三つの警句を補充した。対話によって理解を求めるにしても、理解して対話に達するにしても、ここではすべて「対話」の精神の根本真実は、相互理解の精神を含んでいることを具体的に表わし、強調している。それゆえ、

「対話」はまさに「理解」を追求する技術と智慧である、と言える。宗教の理解は、我々に宗教対話を実践する有効な方法を提供した。

二　宗教対話の直面する苦境

前に述べたように、「対話」は「理解の技術」であるが、この「技術」は高度で難しい技術であり、本当に実施してみると、口で言うほど容易ではない。多くの成功したように見える「対話」は、すべて互いの深い次元の理解が欠け、最も根本的な意思疎通に達するのが難しいので、膠着状態になり、困難に出合ったのである。このことは我々が論じる現代社会のなかの宗教対話に、大きな暗い影を落としている。

はじめに、さまざまな宗教は異なる信仰体系として、すべて自身の守る原則と踏襲してきた歴史の伝統があり、これらの原則と伝統は、しばしば互いの認知、信仰の相違を形成すると同時に、また種々の誤解や不理解をもたらす。全体から見ると、さまざまな宗教は、実際に存在する社会文化の実体として、現実を超越する信仰理念もあるし、またしばしばその生存の現実と関連する一定の政治理念も保持している。これと呼応して、これらの宗教はそれぞれ特有の信仰規範と政治原則を構成しており、ひいては排他性や排外性のある教義体系、倫理観念、生活方式を備えている。これらの相違は、すぐに各宗教間の誤解や不理解の源となり、その「規範」と「原則」は互いの間の誤解を除去し、矛盾を解決し、理解に到達することを阻止したり妨害したりするかもしれない。ある宗教の信仰体系や信仰の結社のなかで、人々の宗教の義務や使命は、普通その信仰に対する服従、信仰、そしてそれから生まれる功徳に表われる。自己を基準とし、自己の信仰を基準として奉ずる、このような意図と振る舞いは、おのずから宗教の不一致を長期に存在させ、宗教の衝突を免れにくくする。ところが、政治のレベルの折衝において、深い次元の宗教の信仰原則と伝統の重みにぶつかると、政治上の譲歩、妥協が烏有に帰して、もともと到達していた成功も中途で廃され、良好な結果を出すことが難しくなる。このような「シジュホス」[11]の苦労

や徒労は、我々の現実生活のなかのどこにでもある、きわめて普遍的なものである。たとえば、中東問題の平和解決を求めるとても長い道のりのなかで、パレスチナとイスラエルの双方は、その根本的な宗教問題に出合うとき、妥協に達し、継続して深く話し合いに入ることはとても難しい。そのなかの一つの重要な問題は、宗教聖地エルサレムの帰属問題である。パレスチナ側は、エルサレムがその宗教聖地であり、したがってどうしてもパレスチナ国の首都の所在地でなければならないと宣言した。ところで、イスラエルの建国後、その宗教の「聖殿」の地エルサレムは「永遠に分割することのできない首都」であると宣言した。前のイスラエルの国防大臣モシェ・ダヤンは、イスラエルにエルサレムを放棄することを願うならば、「『聖書』をもう一度書きなおし、我々の三千年のすべての信仰、希望、祈祷を抹殺しなければできない」と公言した。したがって、その宗教原則を墨守することと妥協を少しもしないこととは、かなり宗教の不一致の解決を難しくさせ、宗教の衝突をしばしば出現させ、ひいては「宗教戦争」にまで拡大する。そして、その宗教原則を防衛し、忠実に守って戦うために、衝突する双方において、しばしば自分の側を「聖戦」と見なし、したがって宗教のなかの「神聖性」、あるいは神聖感を、現実のなかの政治、経済、文化と衝突させてきわめて複雑な様相を呈し、このような衝突の解決の困難度をますます高める。

次に、各宗教は互いの間の対話において、しばしばそれ相応のモデルを設定するが、これらのモデルは真摯に対話を展開するのを妨げるさまざまな障害となるかもしれない。レイモン・パニカーは、宗教対話の五種の態度に論及したことがある。すなわち、排外論、包容論、平行論、相互浸透論、多元論である。彼の見方では、「排外論」の設ける障害は、「一つの宗教の敬虔なメンバーは、どんなことがあっても彼自身の宗教が真実であると考える。そうすると、この真理の公言は、ある種の内在的な排外性の公言となってしまう」ことにある。「包容論」の問題は、この態度にも「傲慢尊大な危険があり、あなただけがすべてを包括する視

野と寛容の態度を備える特権を持っている以上、ただあなただけが他人に宇宙のなかの位置を与える人である。あなたは自分の考えでは寛容であるが、あなたの傲慢な立場に対して異議を提出する人から見ると、けっして寛容ではない」。「平行論」の宗教対話に不利な所は、「どの人類の伝統もそれ自身が、さらなる成長と発展を与えるすべての要素を持っている、とあまりにもいい加減に仮定する。……どの人類の伝統もすべて自足していると仮定し、かつ相互の学習の必要や長所を否定し、一つの特定の人類の伝統の障壁を越えて互いに交流する必要を否定しているようである」。「相互浸透」論にもまた煩わしいことがある。「この思考には、自分勝手な願望があるのかどうか」。かつ人々はこの相互浸透に対して、本当に自信があるのかどうか。このような態度には、諸宗教の伝統に対する自らの理解それ自体がもたらすかもしれないある種の修正があることによって、また必然的に排斥や反対に出合う。「多元論」は、多くの長所があるけれども、かえってまた互いの仲の良い共存のなかで、対話の必要性を排斥するかもしれない。それは「思想と存在が同一であるという学説を受け入れる勇気がなく」、したがって文化は相対的であるとする態度によって対話を拒否する。(12)

本来、上述の包容論、平行論、相互浸透論、多元論は、なお宗教対話のために一定の空間をとどめている。しかしながら、この認知のうえに、かえって逆向きの発展が出現し、そのうえ影響がとても大きかった。一九八六年、ゲイヴィン・デコスタは『神学と宗教多元論—他の宗教に対する挑戦』という書物を出版して多元論を肯定したことがあり、彼は宗教研究に三種のモデルのあることを認めた。すなわち、多元論、包容論、排他論である。そのなかの排他論は、ただ特定の宗教、あるいはその啓示を真実とし、その他の説明は偽りの振る舞いであると認める。多元論は、すべての宗教がみな真理の要因を含んでいるが、どの宗教も自分だけが最終的、絶対的な真理を有していることを公言することはできないことを是認する。包容論は、両者を総合して、ただ一つの真の宗教が存在するけれども、その真理はまた部分的で、細々とした不完全な仕方で他

の宗教に現われることができることを認める。しかし、十年後、デコスタは、自己の見解を翻して、一九九六年に文章を書いて「宗教多元論の不可能性」を論じ、多元論と包容論はたがいに矛盾しており、ただ排他論のみ足場を持つことができると考えた。この観点は、西洋のキリスト教界のいくらかの学者の支持を得て、「キリスト教の排他性」の必然的な弁護に用いられた。多元論が「相対主義のでたらめの論」と斥けられることによって、キリスト教の「絶対主義」はすぐに再び台頭したのである。このような立場において、宗教対話の真意と誠意はみな消されてしまった。

最後に、当面進行している宗教対話において、「対話」はしばしばただポーズ、意向にすぎず、けっして実質性や深い次元の進展がない場合がある。それぞれの宗教原則を忠実に守り、堅持することによって、宗教対話の空間がとても狭くなる。ところが、このような対話はまたしばしば表面的、周辺的、便宜的、暫定的、あるいはある具体的な目標に奉仕するものとなる。一方では、これらの対話において、関係する宗教は、「対話するが、妥協しない」態度を持ち、したがって対話がいったん始まると、融通をきかせる余地はなくなり、実質的に進展することができなくなる。実際には、対話は理論と実践上の相互理解として、協議と譲歩のための空間を残しておかなければならず、そうでなければ、対話はなく、ただ鋭い対立と矛盾の衝突があるだけである。政治の理念と原則から見ると、「妥協」、「譲歩」はけなす意味に用いる語であり、その反対は「寸土といえども譲らず」、「生きるか死ぬか」であり、最後にはせいぜい「実力」、すなわち「武力」によって強引に問題を解決するしかできない。ところが、このような解決は、けっして絶対的な解決ではなく、隠れた災禍や将来の災禍は無際限であり、絶えず歴史のなかで引き続いていくのである。これが我々が直面する宗教の衝突、政治の衝突の現実の光景である。ただ政治の協議と話し合いから見ると、必要で適当な「妥協」、「譲歩」はかえって協議を達成し、和解を得る技術である。多くの情況のもとで、衝突や対話をするどちらにも、けっして絶対的な優勢はなく、「城下の盟（屈辱的

な条約）はめったになく、したがって何かを獲得することを希望すると同時に、また何かを差し出す準備もしなければならない。中国と西洋の文化交流の歴史において、イエズス会の伝道師マテオ・リッチは、中国文化に賛同し、中国の礼儀、習俗に譲歩する方法を取って、布教の成功を収めたが、このような努力はカトリック教内部で「原則の放棄」、妥協譲歩と斥けられ、その結果は「典礼問題」となり、中国と西洋の対話の大門を閉ざした。ところが、この歴史の懸案は今に至るまで残り、マテオ・リッチに対して、究極的にどのように評価し、どのように位置づけるべきなのかは、依然として中国と西洋の双方の微妙な問題である。他方、いくつかの宗教対話のなかで、人々はただ自分で力説しようという意図だけあって、相手の話を傾聴する誠意がないかもしれない。その結果、多くの対話において、「我」と「汝」が融合し意思疎通する雰囲気を見つけることがとても難しく、しばしば「我」と「他」の隔たりが現われる。人々はただ自己の立場、態度を表明するだけで、立場を換えて、相手の心境、訴えを体験しようと思わない。そうすると、いわゆる「対話」は最終的に、反応や共鳴がないか、または新しい矛盾や衝突を引き起こすただの「独話」、「独白」にすぎなくなる。

三　宗教対話の現実の希望

現代文明の発展は、我々の現今の宗教対話のために新しい契機を提供し、人々に新しい希望を見せた。世界の発展から見ると、人類の互いの関係は、過去のいかなる時期よりもさらに直接的で密接である。科学技術の発達、交通の便利さ、情報の伝播のほとんど同時であることは、世界を「小さく」した。「グローバリゼーション」という阻止することのできないうねりは、「地球村」の村民が互いの出会いと共存を回避することを難しくする。このために、「共存するか、またはともに滅びるか」は、もはや人騒がせな言論ではなく、生々しい現実である。このため、人々は対話をして、「共在、かつ共存」の道を見つけなければならない。たとえば、現今の人々は、テロリズムを厳しく非難し、

反対し、攻撃すると同時に、またテロリズムが生まれ蔓延する根本原因を分析し、根本的に矛盾を解決し、テロリズムの広がる土壌を除去しなければならない。ところが、ただ報復的な、暴力によって暴力に抗したり、互いに恨みを報い合ったりすることによれば、せいぜい永久に安らぎのない悪循環に陥るしかない。当面の社会の政治衝突は、一方では、経済的利益のうえでの原因があり、他方では、文化、民族のうえの根本原因があり、文化、民族の間の相違と衝突は、深い次元や中心部分でしばしば宗教の相違と関係している。このように、現代社会においては、宗教の影響によって衝突を解決し、世界平和を促進させることは、きわめて必要である。このほか、当面の政治の協議や和平交渉において、宗教界、とくに宗教リーダーも積極的に参加し、そのきわめて大きな影響力を発揮すべきである。国際連合のコフィ・アナン事務総長は、「世界の著名な宗教と精神のリーダーが団結して、平和をアピールすれば、新しい千年の平和の展望を切り開くであろう」と述べたことがある。このような政治レベルの対話と平和を勝ち取ることは、けっして宗教の人士が自身の信仰の原則を放棄する必要がないが、世界に関心を持ち、人々の苦悩に同情するという、社会に対する責任感を強化し、「平和の使者・慰撫者としての宗教の積極的影響力を発揮する」。ここで、アナンはさらに宗教リーダーの信徒に対する影響力、宗教の結社・グループに対する正しい指導力を発揮することを強調した。「問題はこれまで信仰にあるのでもなく、聖書、モーセ五書、コーランにあるのでもなくて、信徒にあり、人間の行動にあった。あなた達は再びあなたたちの信徒に平和と暴力を見分ける方法を教えなければならない」[13]と。このような平和の使命と責任は、宗教間の積極的な対話を促進し、このためにそれ相応の貢献をすることができる。

宗教それ自体の発展から見れば、このような宗教間の意思疎通と対話は、またしだいに発展して時代の主流となった。カール・ヤスパースは、西暦紀元前五、六世紀の人類の文明の発展が現わした「枢軸時代」に論及したことがあり、この時代の重要な標識は、世界

の各大宗教の萌芽と誕生であり、古代ヘブライ文明のなかのユダヤ教の出現、古代ギリシャの宗教神話の盛んな発展、古代インド宗教の重大な革新と仏教の時運に応じた出現、古代中国の儒、道思想の現われとその宗教的な形成などを含む。注意に値することは、これらの宗教や関連する思潮には、地域や民族を越えた発展があり、「グローバリゼーション」の意図や努力が現われたことである。たとえば中国の儒家が提唱した「四海一家」、「世界大同」などの思想のようなものである。ある人は指摘した。二十一世紀の人類の発展は、一つの新しい「枢軸時代」に入るかもしれず、世界の宗教にも新しい方向性や活動の仕方がある、と。このような兆しは、実はすでに二十世紀の末葉に、宗教界が共通点を求めて提携し、ともに世界平和を創造する努力のなかに見られた。たとえば、一九九三年八月二十八日から九月四日まで、世界の宗教界の人士は、アメリカのシカゴで第二回の「世界宗教会議」を開催した。これは百年前の「宗教間の兄弟のよしみ」を旨として興った「世界宗教会議」よりもずっと大きな規模であった。「ほとんどすべての宗教から六千五百人が参加」して、人類の宗教史上、第一号の「地球倫理に向かう宣言」[14]を制定、発表した。一九九七年十二月に、ハンス・キュングは、彼が起草した「人間の責任の世界宣言」をもって、地球倫理討論会に参加し、「世界倫理宣言」を採択することを企図し、彼はこのような努力のために『地球政治と地球経済のための地球倫理』という書を執筆した。二〇〇〇年八月二十八日から三十一日まで、世界の多くの宗教リーダーは再びアメリカ・ニューヨークにある国際連合本部に集まり、「宗教と精神のリーダーの世界平和千年大会」を開催し、平和を追求する新しい姿で新しい千年紀の到来を迎えた。これらの実践レベルの努力と実際の行動は、再び宗教間の対話の興味と熱情を巻き起こした。

宗教思想と理論的認識のうえで、宗教対話はまた深く宗教対話を進める希望を獲得した。現代文明のなかの宗教の信仰はさらに進歩的で、開放的である。多くの宗教思想家と理論家は、自己の宗教伝統を反省するなかで次のことを深く体得する。その宗教の依存することのできる啓示に神聖な源はあるけれども、宗教信仰の説明と宗教学説の形成はかえって人間によって実現されたものであり、このような人間の理解と認知には発展する可能性と空間があり、古から今まで永遠に変わらないものではない、と。このような開放的な発展や理解は、自己の宗教伝統と信仰原則に対してさらに正確で公正な自信をもたらした。ある意味では、宗教学説は絶えず発展するべきであり、これと呼応する信仰原則も時代の変遷、理論の昇華にともなって、調整したり改良したりすることができる。まさにこのような革新的意義のうえから、オイゲン・ビセルは、その『第三の千年の敷居を越える』という文章のなかで、「バチカン第二公会議」以来、カトリック教に出現した三つのレベルの再構築を総括した。「服従的な信仰から理解的な信仰に再構築し、弁明的な信仰から体験的な信仰に再構築し、功徳的な信仰から責任のある信仰に再構築する」[15]と。これらの「再構築」は、さらに高いレベルから伝統の「排外論」の影響を止揚し、宗教間の新たな対話の新しい道を開く。

最後に、宗教対話の実現性の希望は、やはり伝統宗教の精神性のある資源を発掘し新たに解釈することにあることを指摘する必要がある。そうすれば、我々の今日の対話のために、さらに堅固で持久的な基礎をうち立てることができる。各大宗教にみなこのような資源があるのは、真の宗教精神が遠い古より人々の間の平和、社会のなかの安寧、人類の心の平静、人生社会の限界に対する超越を提唱してきたからである。「さまざまな宗教は、異なる言語と説明によって、『生命を守る』、『至善』、『平和』、『博愛』を強調する。……たとえば中国の伝統宗教のなかの『仁愛』、『仁とは人を愛すことなり』、『仁義礼智信』によって社会に影響を与えるという思想である。道教は、自然に回帰し、自然とともに平和を保持し、万物平等、物我合一、世界の調和を認める主張である。仏教の『大悲を首と為す』、『慈悲を懐と為す』、『普く衆生を度す』の精神[16]、及びキリスト教の「博愛」、「寛恕」、「謙虚」の境地、イスラーム教の「吉慶」、「平和」の意向などは、みな宗教間の誠意ある対話のために、その「善を為す」、「和を

致す」、「仁を成す」の前提を提供し、必要な精神的条件を準備することができる。もし現代文明の影響のもと、各宗教が真に積極的、能動的な態度で、その「内向」、「外向」双方向の探求を展開し、その信仰の智慧によって、現実の障害を超越し、あるいは解決するならば、我々には「任重くして道遠し」の宗教対話に対して希望が満ち、自信を持つ理由がある。

注

(1) Hans Kung: *Global Responsibility, in Search of a New World Ethic*, SCM Press, 1991, p.54.

(2) Hans Kung: *Global Responsibility*, p.56.

(3) 孔漢思（ハンス・キュング）、庫舎爾（カール・ヨーゼフ・クシェル）編『全球倫理、世界宗教議会宣言』（地球倫理、世界宗教会議宣言）（四川人民出版社、一九九七年）一五—二六頁。

(4) 雷蒙・潘尼卡（レイモン・パニカー）『宗教内対話』（宗教文化出版社、北京、二〇〇一年）三頁。

(5) 同前、五—一〇頁。

(6) 中国主教団秘書処出版『梵蒂岡第二届大公会議文献（バチカン第二回公会議文献）』（天主教教務協進会出版社、台北、一九八八年）六四三頁。

(7) 同前、六四四頁。

(8) 同前、六四四頁。

(9) 卓新平『精神世界与精神生活（精神世界と精神生活）』（『宗教比較与対話（宗教比較と対話）』第三輯、宗教文化出版社、二〇〇一年）六頁。

(10) Hans Kung: *Projekt Weltethos*, Piper, München, 1990, p.13.

(11) シジュホスは、古代ギリシャ神話の人物で、伝えるところによれば、彼は冥府で罰を受けて、一つの巨石を山頂まで押し上げなければならない。彼が大変な苦労をして巨石を山頂にまで押し上げたとき、巨石はかえってもとの場所に転がり、彼は改めて始めなければならず、このように繰り返すだけで、無駄骨で何の結果もない。フランスの現代哲学家のアルベール・カミュは、『シジュホスの神話』を書いて、現実存在のなかの不条理を描いた。

(12) 雷蒙・潘尼卡『宗教内対話』（前掲同書）三—一〇頁を参照。

(13) 王作安・卓新平主編『宗教：関切世界和平（宗教—世界平和への関心）』（宗教文化出版社、北京、二〇〇〇年）一六—一七頁。

(14) 孔漢思、庫舎爾編『全球倫理、世界宗教議会宣言』（前掲同書）二—三頁。

(15) 畢塞爾（オイゲン・ビセル）『跨越第三箇千年的門槛（第三の千年の敷居を越える）』（漢堡天主教科学院、一九九六年）一三頁。

(16) 王作安・卓新平主編『宗教：関切世界和平』（前掲同書）一八—一九頁を参照。

（たく　しんへい／中国社会科学院研究員・世界宗教研究所所長）
（訳・かんの　ひろし／創価大学教授）